

第二百九十五回 青葉会

平成二十二年十月二十八日(木) 午後六時〜九時

丸紅一階レストラン「談話室」

〈選者〉 ☆川合万里子 先生

〈出席者〉

石川清 今井紀久男 大林猛 小川恭延 川口孤舟 小西弘子 豊田ゆたか

〈投句〉

福島正明 山崎亜也 山内天牛
伊賀山そらお 柿崎忠彦 朱牟田恵洲 土谷堂哉 中野一灯 南平和夫 宮内規雄

〈紙上選句〉

渡邊盛雄
楠田彦十 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 村田くに子 山崎青史
山本三恵

《選者吟》

残り蚊を外へ出るたび連れ帰り
秋日浴び象の老斑桃色に
心病む友の自伝を読む夜長
襟元へ栗鼠が胡桃を入れたがり

万里子 (猛・恭・天)
全 (彦・亜)
全 (清・允)
全 (亜)

ゴシックは選者の天

《互選句》

七点

試し書く遺言状や秋灯下

(青↓「秋灯下遺言状の試し書き」では?)

恵洲 (恭・孤・弘・敏・ゆ・隆・青)

六点

天金の剥げし聖書や秋日影

(青↓下五は「秋灯下」がいいのでは?)

一灯 (彦・隆・正・く・亜・青)

五点

豆腐屋のラツパ遙かに秋の暮

☆違ふ田の新米それぞれ噛みしめる

☆遠山の夕陽を残し下り鮎

(青↓「遠山を夕陽染めみて下り鮎」では?)

孤舟 (万・清・允・青・三)

(中七↓「夕陽の残り」?)

そらお (猛・龍・隆・く・天)

四点

☆柿すだれおぼあゝの低き語り口

孤独死の窓に朝顔咲きにけり

空と風人の装い秋を知る

秋冷や卓一枚のスーブ皿

(允・青↓中七↓「卓に一枚」としては?)

弘子 (猛・彦・天・ゆ)

うかうかと銀杏ひとつ踏みにけり

連れ立ちてべつたら市の灯の中へ

☆木枯一番神保町にある寡黙

垂れこめし雲秋霖の天城越え

(青↓木枯は一号が正しい。一番は春一番)

盛雄 (彦・龍・ゆ・隆)

三点

☆美人画に見入る年増や秋夕日

鑑真の渡海六たびや葛嵐

(青↓「葛嵐鑑真渡海六たびとか」では?)

紀久男 (万・敏・亜)

☆色鳥や歩荷(ぼっか)に譲る休み石

円高や鳥は渡つて来るかしら

神在月深き地底の人救ふ

(チリ・サンホセ鉱山の落盤事故、全員救出)

堂哉 (正・亜・青)

一灯 (万・紀・龍)

正明 (孤・弘・ゆ)

天牛 (恭・弘・敏)

上村松園展

二点

☆時流る未だに会えぬ赤蜻蛉

清 (万・紀)

(☆上五↓「時迅し」では? 赤とんぼは嫁さまとんぼとも)

(農粟の影響か今年は異常に少ない)

木の実無し熊子熊連れ里山に

全 (猛・弘)

三津五郎三代追善狂言

どんつくを野暮と粹とに踊り分け

紀久男 (敏・天)

帰るべき海あり鷹の渡りあり

孤舟 (恭・敏)

曼珠沙華咲くにためらひなかりけり

全 (紀・龍)

☆熱燗の酌を習ひて下戸の酌

弘子 (万・彦)

☆長き夜や妻と譜読みのレクイエム

堂哉 (万・紀)

(☆…中七↓「妻と譜を読む」)

☆じじばばも声を嗶らして運動会

ゆたか (万・孤)

コスモスや夢の中まで押し寄せ来へく

規雄 (紀・龍)

マロニエの實の笑むところ踏みしだく

亜也 (正・三)

悲しみを越へて笑ふや秋の声

清 (隆)

一点

上村松園「焔」

冷(すき)まじき嫉妬の眼(まなこ) 金泥に

紀久男 (弘)

リハビリに手応えありし粟の餅

全 (天)

秋時雨伊根の舟屋に鷗鳴く

恭延 (く)

秋の旅浦島伝説聴き乍ら

全 (く)

(☆…上五↓「旅の秋」では?)

奥入瀬に心を洗ひ紅葉狩

忠彦 (清)

やや寒や肌荒れ見えるハイビジョン

全 (紀)

満月やみんな詩人になつてをり

孤舟 (ゆ)

秋の声秋の静寂(しじま)と似て違ふ

恵洲 (三)

菊三本活けて二人の菊見宴

ゆたか (清)

陋屋にしがみつき咲く彼岸花

和夫 (猛)

☆菊日和金婚夫婦の笑顔かな

規雄 (万)

彼岸花忌む人あれど我好む

亜也 (三)

日帰りの東海道や初を焼く

天牛 (隆)

●次回青葉会

十一月二十五日(木) 午後六時〜九時 丸紅一階コンチエルト バンケットルーム

▲当季雑詠各自五句。投句二句

十二月九日(木) 寄席見物(末廣亭 昼の部) ↓年忘れ句会(コンチエルト談話室)

以上 文責 紀久男

平成二十二年十月句会

一、今回は万里子先生以下11名出席。投句8名。前回、先生の詠まれた豹紋蝶の標本を天牛さんが

持参され回覧。雌雄の翅の表裏の模様と色につき説明して頂きました。天牛さんが寄稿された社友会のホームページ掲載文を隆さんがコピーしたものを回覧。

『虫とともに生きる』：出版記念会の折の写真を挿入した簡潔な名文です。

先生から伊那のブロッコリーとチーズ・ハムのおつまみ。弘子さんから仙太郎の菓子「こぐり」。清さんから「菊正宗」熱燗10本（一升）。正明さんから焼酎「晴耕雨讀」の寄贈。更に小生の御前崎土産。しらすと桜海老の生と釜ゆで。左党好み揃いましていつもの調子で盛り上がった次第。

選句段階で皆さん気合が入っておられることとレヴェル高まっていることを感じました。案の定、四点以上の人が9名、14句と好句佳什（かじゅう）が揃いました。この調子が続くよう

ですと、当会も相当な高水準に到達していると評価されると思います。手術された恵洲さんは社友会総会（八日、如水会館）で幹事挨拶されましたが、順調に快復されつつあるようです。同じく術後の忠彦さんも順調のようです。痛みがまだとれぬようですが十一月の句会には出席できる見通しです。

二、関係者近詠

迅雷やレジ袋飛ぶ交差点	万里子	爽やかや論語を語る小泉さん	天牛
草田男師より長く生き草田男忌	全	城崎の外湯めぐりや秋柳	恭延
立秋や主治医と肝斑（しみ）を比べ合ひ	全	虫の音を肴に独り出羽の酒	清
敗戦の回顧と飽食八月尽	全	犬蓼の咲く道を避け孫帰る	和夫
涼新た文債金債完済し	全	クリユニーの貴婦人に逢ふ巴里の秋	亜也
継ぐものも益客も無く本家なり	眞希子	すすき折る芒に命無きごとく	青史
お座りができ水遊びの仲間入り	全	ときめきの羽化せぬままに秋暮るる	全
どこへでも虫・花図鑑夏休み	全	三津五郎三代追善「連獅子」	
昼顔の小花小さく残りけり	弘子	爽やかや大和屋五代の楷書芸	紀久男
新涼や水まるやかに米洗ふ	全	大和路や車中の輪唱天高し	堂哉
線香のかをりと眠る里の盆	忠彦	葛切りや小雨に霞む南大門	全
窓の月眼鏡探す間に木の蔭に	和夫	刈り込みに透かして青き秋の空	全
シヨートステイ隣は桜のゴルフ場	全	ここに居るこの不思議さよ彼岸花	全
赤腹やラジオをとめて聴きをりし	紀久男	湯気立てて故山の香る茸飯	一灯
以上『萬緑』十一月号より		鉄色の運河に白き秋時雨	全
白露や妻待ちている病棟へ	規雄	吸い飲みを見つむる母の枯野かな	丹野敦雄
（「NHK俳句」十一月号 高野ムツオ選）		ニューヨーク	
村の灯の漁火めいて星月夜	允章	垂直に水平刺さり秋虚空	全
秋天へスカイツリーのまだ伸びる	全		

（NHKラジオ折込み都々逸 十月「た・び・さ・き」）
単純明快美人にやもてぬ悟つて虫の音聞く夜長 恵洲

平成二十二年十一月十三日

紀久男 記